

ヘーゲル『精神現象学』における否定性の問題 ——ヴォルフガング・ボンジーペン 『ヘーゲルのイェナ期論考における否定性の概念』を読む——

岡崎 龍

目次

はじめに

1. イェナ初期における否定性の諸様態
 2. 「イェナ体系構想」における否定性の二様態—「存在の否定性」と「自己意識の否定性」
 3. 『精神現象学』における否定性の問題
 4. 『精神現象学』における否定性の把握の成否
- おわりに

はじめに

ヘーゲル哲学において「事実のもつ否定性は、単に事実であるところのものや事実であると主張されているところのものとは別のものへと事実を変える」¹というアドルノの指摘によく表れているように、ヘーゲル哲学においては「否定性 Negativität」概念が本質的な契機をなしている。例えば『精神現象学』²の「序論 Vorrede」において、「否定的なものを直視し、否定的なもののもとにとどまること」³によってはじめて精神は力をもつことができると言われる。しかしながら、「否定性」概念に対してヘーゲルは一見して理解できる明確な規定を与えているわけではない。ヘーゲル哲学の根幹をなす概念のひとつである「否定性」について考えるための足掛かりとして本稿で検討するのが、ヴォルフガング・ボンジーペンの学位論文をもとにして書かれた、『ヘーゲルのイェナ期論考における否定性の概念』（1977）⁴である。いまか

ら40年近く前に書かれたものでありながらも、ヘーゲルにおける「否定性」概念を緻密に検討したものとして今日なお評価の高い同書は、ヘーゲルのイェナ期の諸論考を「否定性」というキーワードをもとに発展史的に整理しようとするものである。

イェナ期にヘーゲルが展開した議論において「否定性」概念がもつ意義について、後期のヘーゲル哲学におけるそれと区別しながら、著者は次のように述べている。

第一に、否定性の概念はイェナ期のヘーゲルの思考の中心概念を示している。第二に、イェナ期の諸論考において、否定性の概念の諸々の形式はまだばらばらにあらわれていて、それゆえに『大論理学』においてよりも「イ

頁を表記するとともに、ボンジーペンを「著者」と呼ぶ。同書の目次は以下のようになっている（節以下は省略）。

緒論

第一部 イェナ初期の体系の試み

- I 神の死、ギリシャ悲劇、絶対無
- II 悟性的反省にたいする批判の基礎
- III 近代的主観 - 反省哲学にたいする批判
- IV 思弁的思考の基礎としての否定性の概念

第二部 イェナ期1803-06年における体系の試みの拡大と変化

- I 近代的・現代的社会における否定性
- II イェナ体系構想における否定性と自己意識
- III 否定性の諸形式相互の関係

第三部 『精神現象学』における否定性の概念

- I 自己意識の歴史の理念
 - II 『現象学』の解釈
 - III イェナ期初めと終わりにおける体系の端緒
 - IV 絶対的否定性の過程の基礎づけの失敗
- 結論的考察

本書は1972年に提出された著者の学位論文をもとにしている。我が国において、著者は哲学文庫版の『精神現象学』の編者としてよく知られており、『精神現象学』のほかには、自然哲学に関してヘーゲルのほかカントやシェリングらとの関連を扱った *Die Begründung einer Naturphilosophie bei Kant, Schelling, Fries und Hegel : mathematische versus spekulative Naturphilosophie* (Frankfurt am Main, 1997) などがある。

¹ Theodor, W. Adorno, *Drei Studien zu Hegel* (Frankfurt am Main, 1963) 43. 強調引用者。

² 以下、『精神現象学』からの引用は、Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, in: Wolfgang Bonsiepen und Reinhard Heede (Hg.) *Gesammelte Werke Bd. 9* (Hamburg, 1980) に依拠し、GW9.の略号と頁を表記する。なお〔〕は引用者の補足を指し、特に断りのない限り強調はすべて原著者による（他の著作からの引用についても同様）。

³ GW9., 27.

⁴ Wolfgang Bonsiepen, *Der Begriff der Negativität in den Jenaer Schriften Hegels. Hegel-Studien. Beiheft 16* (Bonn, 1977) 以下本稿では同書を『概念』と呼び、BN.の略号と

エナ期の諸論考においてのほうが〕よりよく相互に区別されうるのである⁵。

著者にとって、ヘーゲルがイエナ期に展開した「否定性」概念とは、『大論理学』における一義的なものには回収されえない多様性をもつものである。また、そうであるからこそ、一義的な「否定性」概念へと収斂する経緯が、イエナ期の諸論考の分析を通じて明らかにされうると著者は考えているのである。

さて、著者の研究の特徴として強調しておきたいのが、著者が、ヘーゲルの試みを、いわば否定的なものにたいする否定的なかかわりについての探究として理解しようとしているという点である。本書の緒論において著者は、一方で近代において顕在化した問題として「疎外」を挙げる⁶とともに「これは現実の側における否定性である」、それに伴って生じる、主体における否定性すなわちニヒリズムなどを引き合いに出しながら⁷、これらを統一的に把握するものとして、ヘーゲルの「否定性」の概念を明らかにすることを目指しているのである。

本書では、イエナ期の初期（第一部）、中後期（第二部）、そしてイエナ期の総決算と目される『精神現象学』（第三部）にわたって、「否定性」概念の変遷が追われている⁸。第一部では、イエナ初期のヘーゲルの諸論考、とりわけ「差異論文」、「懷疑論論文」、「信と知」に寄り添い、「否定性」概念が彫琢されるいきさつが、「思弁」ならびに「懷疑主義」、「人倫における悲劇」の役割に焦点を当てながら検討されている。第二部では、1803-06 年にかけてのいわゆる「イエナ体系構想」ならびに『人倫の体系』といった社会哲学的な視座をもつ諸論考に依拠しつつ、「承認をめぐる闘争」、「身分」、「国家」といった概念に触れながら、「否定性」の

位置づけが、とくに「自己意識における否定性」ならびに「存在における否定性」という二つの側面から問題にされる。そして第三部では、第二部までの議論を踏まえながら、『精神現象学』において、どのようにして「否定性」概念の統一的把握が試みられているのかを、そしてまたその成否を、問うものになっている。このように、本書はヘーゲルのイエナ期の思索の推移を「否定性」概念を多角的に一とりわけ認識論的な論理構造としてのそれ、ならびに存在論的な現実の構制としてのそれという二側面から一見直すという観点から幅広く論じるものである。

もとより、著者が論じる個々の論点に関して、その妥当性を逐一確認してゆくことは、紙幅の都合上不可能であるため、本稿では、『精神現象学』においてヘーゲルが試みていると著者が見なす、「否定性」概念の統一的把握についての議論を主眼的に検討していきたい。

そこで本稿では、以下のように議論を進めることにする。まず、『概念』第一部の議論のなかでも、『精神現象学』に至るまで形を変えながら存続し、イエナ期のヘーゲル哲学の発展において一定の影響もつ、「哲学の欲求」にはじまる「体系の試み」における「懷疑主義」のあり方を簡単に検討する（第1節）。ついで、第二部Ⅱ・Ⅲにおいて展開される、イエナ中後期における「イエナ体系構想」において描かれる、「存在の否定性」と「自己意識の否定性」という両概念についての議論に基づいて、イエナ初期以来の「否定性」概念がどのように『精神現象学』の問題構成へと方向づけられてゆくのかについて検討する（第2節）。続けて、第三部の議論に寄り添いながら、「存在の否定性」と「自己意識の否定性」という二つの否定性を統一的に把握する『精神現象学』の試みにおいて、著者が着目する「感覚的確信」から「生命と自己意識」を経て「自己意識」章終盤に至る議論から、『精神現象学』理解を検討する（第3節）。そのうえで、著者が『概念』全体を通じて結論づける、『精神現象学』にたいする批判とその成否の判断を批判的に考察する（第4節）。以上を通じて、ヘーゲルが展開する「否定性」の概念について、新たな視点から今後の展望を述べてみたい。

⁵ BN., 19.

⁶ BN., 11.

⁷ BN., 14.

⁸ ヘーゲルの思想形成過程の区分に対しては多くの論者によってさまざまな見解が出されているが、著者によればおおよそ次のように区分される。すなわち、「初期」をシェリングとともにヘーゲルが編纂した『哲学批判雑誌』の時期（1801-02 年）に、中期を諸『イエナ体系構想』の時期（1803-06 年）に、後期を『精神現象学』執筆ないし脱稿の 1806-07 年に、著者は区分している。

1. イエナ初期における否定性の諸様態

イエナ初期の論考、とりわけ「差異論文」⁹、「懷疑主義論文」において、ヘーゲルにとって主要な問題であったのは、カントならびにフィヒテの哲学の乗り越えであった。そしてこれらの論考は、それらを掲載している『哲学批判雑誌』の共同編集者で、のちに『精神現象学』において袂を分かťこととなるシェリングからの強い影響のもとで書かれているものである。シェリングの同一哲学を通じて、カントやフィヒテの反省哲学—主観と客観の分裂が乗り越えることのできないものとされる哲学—の乗り越えを目指すことを、この時期のヘーゲルは目指している。近代という時代—それは「神の死」や「ニヒリズム」によって代表されるものであった—に裏付けられた性質をもつ反省哲学を乗り越えることこそ、この時期のヘーゲルが見た「哲学の欲求」に他ならない¹⁰。

では、こうした「哲学の欲求」のもと、ヘーゲルが目指すのはなんであるのか。このことに触れて、著者は次のように言う。

分裂の経験から惹起されるところの哲学の欲求を視野に入れつつ、ヘーゲルは哲学にとって第一のものを無 *Nichts* と名付ける。分裂した近代の意識にとって、絶対者とは無なのである。けれども、こうした絶対者という無は、意識にとって或るもの *Etwas* にならねばならない。意識に対して絶対者は、決して存在しない単なる無から、存在し、かくして無の経

験から生命が生じるところの無にならねばならないのである¹¹。

問題は、無が規定されたものとして、すなわちただただ存在に対立するものとしての無ではなく、「或るもの」としての無として、哲学の対象にならねばならないということである。

「存在」と「無」を悟性的な対立のうちにとどめ置かない仕方で思弁的に体系化することこそ、「哲学の欲求」に基づくヘーゲルの「体系の試み *Systemansatz*」であるが、このためにイエナ初期のヘーゲルが着想を得たのが、「懷疑主義」の意義である。「懷疑主義論文」は、ヘーゲルの同時代人であるシュルツェの論駁という目的のために書かれたものであるが、この著作がくだんの「体系の試み」にとって重要な意義をもつのは、懷疑主義と哲学の関係をどう理解するかという観点においてである。それは、「感覚的知覚の確実性に固執し」¹²経験的な存在者を無条件に肯定するシュルツェの懷疑主義に対して、「哲学そのものへ向かう」¹³という、古代の懷疑論の有効性に他ならない。すなわち、ヘーゲルの時代にあって勢いをもつ悟性的な哲学自身に向かい、その悟性性—存在と無との対立に固執する—を打破するものとして、ヘーゲルは古代の懷疑主義の持つ「知に対して純粋な否定性を主張する」¹⁴という意義を認めたのである¹⁵。

2. 「イエナ体系構想」における否定性の二様態——「存在の否定性」と「自己意識の否定性」

本節では、『概念』第二部において、社会哲学的な視野のもとで「承認をめぐる闘争」の概念や「身分」ならびに「国家」についての議論（Ⅰ）に続けてⅡ・Ⅲにおいて論じられる、「存在の否定性」ならびに「自己意識の否定性」という、のちに『精神現象学』で統一的な把握が試みられると著者がみなす二つの概念について検討する。

⁹ G. W. F. Hegel, *Differenz zwischen Fichte'schen und Schelling'schen Systems der Philosophie*, in: Hartmut Buchner, Otto Pöggeler (Hg.) *Gesammelte Werke Bd. 4* (Hamburg, 1968) 村上恭一訳「フィヒテとシェリングの哲学体系の差異——十九世紀の初頭における哲学の状況を展望するためのラインホルトの寄与に関して」(「差異論文」)『ヘーゲル初期哲学論集』(平凡社、2013年)所収。

¹⁰ 「哲学の欲求」について、ヘーゲルは次のように述べている。「哲学がまとっている特殊な形式をわれわれが正確に考察してみるならば、一方でわれわれは哲学のこうした形式が精神の生ける独創性から生じているのがわかるが、この精神は引き裂かれた調和を哲学において自ら *durch sich* 回復し、自発的につくりあげたものである。他方でわれわれは、精神が、分裂をまとうとともに、そこから体系が生じてくる場所の特殊な形式から生じているのも分かる。分裂とは哲学の欲求の源なのであって、時代の教養形成 *Bildung* としては〔哲学の〕形態の不自由な所与の側面なのである」(Hegel, *Differenzschrift*, in: *GW4*. 12; 「差異論文」31頁)。

¹¹ *BN.*, 31.

¹² *BN.*, 33.

¹³ *BN.*, 33.

¹⁴ *BN.*, 34.

¹⁵ 紙幅の都合上、「懷疑主義」についてはこれ以上立ち入った論述をすることはできない。さしあたり、加藤尚武「ヘーゲル哲学と懷疑主義」京都大学大学院人間・環境学研究科「人間存在論」刊行会編『人間存在論』第13号、2007年を参照。

第二部Ⅱ「イエナ体系構想における否定性と自己意識」において、著者はイエナ期における「否定性」概念の新たな位置づけを見出す。初期から引き継がれる、「矛盾の思考」というモデルに加えて、そこでは「意識」ないし「自己意識」という概念枠から否定性を考察することが可能にされているのである。著者によれば、イエナ期は、意識ないし自己意識という概念枠の登場の観点から、次のように区分される。

〔イエナ期ヘーゲルの〕思考の展開の内部で様々な段階が見出されるとき、〔まず〕『哲学批判雑誌』を『差異論文』ならびに『人倫の体系』とひとまとまりにすることができる。この第一の段階は、初期の論理学構想に帰せられる。第二の、新たな段階を叙述するのが「1803/04年の体系構想」であり、この構想は意識概念ならびにその断片的な引き継ぎと拡大に伴う特殊な試みとして、独立したものとして受け取られねばならない。第三の段階は、「1804/05年の論理学と形而上学」、「1805/06年の実在哲学」、そして『精神現象学』とみることができ、この第三段階は、そこでは自己意識の概念が中核的な意義をもっているということをもって特徴づけられる¹⁶。

ここでは、中期の諸体系構想において現れる新しい論点が明らかにされている。論理学と形而上学との分離に依拠し、悟性のなす対立を解消するもの、という位置づけをもつ論理学の完成ののちに形而上学を展開する「初期の論理学構想」¹⁷に基づく第一段階から一步進んで、中期以降は、「意識概念（ないし自己意識）」の導入によって新たな側面が描かれることになる。

では、こうして新たに「意識」概念が導入されることによって、「否定性」概念はどのようにして新たに構想しなおされることが可能になるのだろうか。このことは、イエナ中期の体系構想における「存在の否定性」と「自己意識の否定性」という二側面からまず論じられ、続けてこの両者を統

一的に把握することを目指す、『精神現象学』の「教養形成過程の否定性」という観点へと引き継がれていくことになる。この連関を見ていこう。

同章1節で、イエナ中期以降、すなわち「実在哲学」以降における存在と自己意識という両側面における否定性を、著者は次のようにまとめる。

イエナ期の終わりになると、とりわけ抽象的な無という誤解を避けるために、〔イエナ初期の特徴をなす〕無という否定性にかわって存在という否定性があらわれてくる。根本的には否定性の両形式は互いに一致するのではあるが、イエナ初期の体系の試みに対して新しいのは、存在の否定性と自己意識の否定性とが積極的に相互の関係性のなかで定立されているということである。否定性の概念はいまや二つの異なる意味を持っており、両者の統一にたいする問いが立てられるのである¹⁸。

主体にとって見知らぬものととどまる「存在の否定性」と、それをわがものとするべくこうした存在にはたらきかける「自己意識の否定性」という両側面から「否定性」概念を捉え返そうとするのが、イエナ中後期のヘーゲルが獲得したシエマであるとされている。つまり、主体があい対する「存在」と、そうした存在に能動的にかかわるものとしての「自己意識」という二つの極が持つ否定性は、相互に媒介しあうものとして、統一的に把握される必要があるのである。

こうした「否定性」の両側面をより具体的な側面から規定するべく著者が目を向けるのが、「疎外」の問題に他ならない。2節ではこの問題が扱われる。フランクフルト期における神学論の影響を色濃く残し、分裂を運命ないしは悲劇として受容することを論じるイエナ初期とはちがひ、社会がもたらす分裂から積極的な受容をしようとするのがイエナ後期の特徴である。この点について著者は次のように述べる。

ヘーゲルはイエナ後期において、意識は近代社会の持つ否定性を通じて教養形成をさせられうる *gebildet werden können* と信じるよう

¹⁶ BN., 104-105.

¹⁷ この点に関しては『概念』第一部Ⅱ章1節「論理学と懐疑主義の批判的機能」において論じられているが、本稿では紙幅の都合上立ち入らない。

¹⁸ BN., 122.

になる。こうした否定性の英雄的な乗り越えが要求されるのではなく、要求されるのは分裂の否定性へと自らをかかわりあうこと *Sich einlassen* であり、経験をなしこうした教養形成過程へとはいってゆくことへの心構え *Bereitschaft* なのである¹⁹。

まさにここで論じられるのが、「自己意識のもつ否定性」と、自己意識が相対する社会における否定性、すなわち「存在の否定性」という二つの「否定性」を、意識が行う運動のなかで、言い換えれば経験を通じた社会との関わり合いのなかで「総体性として」²⁰捉え返すことなのである。こうした、社会によってつくられながら、しかも社会に対して否定的に関係する、いわば獅子身中の虫としての意識を描くという点に、『精神現象学』における「否定性」の課題が拓かれてくる²¹。著者は、イエナ中期から後期の『精神現象学』への過渡を次のように示している。

それゆえヘーゲルはイエナ期の終わりににおいて、否定性の概念を全く一般的に自己意識の否定性を通じて新しく規定するだけではなく、そこにおいて意識が近代社会における否定性に取り組むところの教養形成過程の否定性を通じて規定することを余儀なくされる。近代社会の否定性の二価的な評価の根底にあるのは、分裂の否定性が一方では乗り越えられるべきであり、他方ではしかし、外的にではなく、むしろ内在的に廃棄されるべきである、という問題である。したがって、意識の教養形成 - 外化過程の可能性が依拠するのは、内在的否定、限定的否定なのである。そして最終的に立てられる問いは、いかにして、否定性の諸形式が、これから構成される意識の

教養形成 - 外化過程のなかで否定性の包括的概念にあって統一されうるかということなのだ²²。

「存在の否定性」と「自己意識の否定性」という否定性の両契機は、「教養形成過程の否定性」によって包括的に把握されねばならず、しかもこのことは「内在的否定」ないし「限定的否定」によってなされねばならない。これが、『精神現象学』の課題である。加えてこのことは、さきの引用でも見たように、意識の一面的——方向的な目論見によって完遂され得るものでは決してなく、むしろ社会との積極的な取り組みを通じてつくりあげられるものでなくてはならないとされていることはいくら強調されてもされすぎることはない。

3. 『精神現象学』における否定性の問題

ではこうした「教養形成過程の否定性」の把握という課題は、『精神現象学』においてどのように仕上げられているのだろうか。本節では、『概念』第三部Ⅱ章以下の主張を検討してみることにする。

同章における議論は、『精神現象学』「意識」章の三つ組み（感覚的確信・知覚・悟性各章）を踏まえて「存在の否定性」の概念の深まりを論じたうえで、「自己意識」章冒頭の「生命」概念を捉え返し、その上でこれを「自己意識の否定性」との関連で論ずるという手順をとっている。

「感覚的確信」は、「思いこみ *Meinung*」という知のあり方とそれが「真なるもの」とみなす「直接的な存在」という対象の所与性の両者を、そうした直接的な対象とされる「このもの」が、実のところ、「このものならぬもの」の否定、すなわち「否定的なもの一般」²³であるというロジックで否定するものである。そして、こうした「直接的な存在」における「否定性」こそ、「感覚的確信」がイエナ初期以来の「懐疑主義」の批判的機能に則って経験する事柄であると著者は述べる。

「存在」が「否定性」によって媒介されているという事態こそ、「存在の否定性」の第一の経験である。

¹⁹ BN., 123.

²⁰ BN., 123.

²¹ こうした、「自己意識」の主体的側面を強調しながらも、それにたいする社会からの影響、すなわち意識の単極的な取り組みに全面的な期待を抱くのではなく、むしろ社会に内在したものとして否定性を描こうとする点に、ヘーゲルのロマン派批判につながる論点を見出すことができよう。ヘーゲルのロマン派批判について参考になるのは、Otto, Pöggeler, *Hegels Kritik der Romantik*, (Bonn, 1956)。

²² BN., 124.

²³ GW., 65.

(…)「なにものかが」存在するという純粋な謂い *das reine Ist-Sagen* という立脚点は、否定の現実存在を拒否することができない。というのは、経験的な定在一般を主張するにあたって健全な人間悟性〔常識；*der gesunde Menschenverstand*〕は自らが「存在を制限ないしは否定を伴う形で」主張しているということを見出すことができないからである。感覚的確信が経験するのは、まさに、経験的な定在一般であるところの純粋な存在の主張は、はじめに〔純粋な存在という主張をするにあたって〕拒絶された否定ないし否定性を承認しなければならないということなのだからである²⁴。

このように、「感覚的確信」の経験においては、意識が「真なるもの」であるとする「純粋な存在」における「否定性」が明らかになる。「純粋な存在」という、否定性の対極にあるように見えるものが、実は否定性によって媒介されたものであるというのが、感覚的確信の経験なのである。

続く「知覚」章でヘーゲルが行うのは、上の引用部に見られる「健全な人間悟性＝常識」の経験する、対象としている物における「一」と「多」の矛盾という事態である。「感覚的確信」は、「個別的なもの」としての対象を「真なるもの」とみなすことに失敗した結果、対象を「一般的なもの」として掴もうとするとき、一つの対象に多なる（一般的）性質が帰属するという矛盾した事態²⁵が、著者が「存在の否定性」に見出す第二の規定、「否定的統一」である。そこで著者は「知覚の論理は、感覚的確信から知覚への移行に際して現れる否定性は、一と多の統一と区別は、同一の関係の中で主張されねばならない、というように考察されねばならない」²⁶とし、こうした「否定的統一」をカントに帰せられる「形式論理学」の自壊の論理を描く「悟性」章の議論につなげてみせる。

「知覚」の経験を通じて明らかにされた、「一と多」の関係における「否定的統一」という議論は、

「悟性」の議論において現れる一著者が「思弁的な意味」を持つとみなす「力」概念に引き継がれることになる。表面的な多様性と内なる統一性という、知覚がもたらす矛盾を解消するべくして現れる「力」概念は、ヘーゲルが「それ自体における区別」すなわち「無限性」²⁷として理解されることになるが、こうした「無限性」概念を通じて、『精神現象学』における「存在の否定性」と「自己意識の否定性」とを統一的に把握する試みに新たな視野が拓かれることになる。というのも、「存在の否定性」は、「それ自体における区別」つまり自体存在と対他存在の間での無限な転倒ないし「反省」²⁸を繰り返すという性質をもつ「生命」という対象として規定されるとともに、自己意識は自己意識で、もはや対象と切り離された独立した実体ではなく対象との関係のうちにのみ存在するという意味で、対象との間の否定的な関係—これは自己意識がまずそれとして規定されるところの「欲望」²⁹に他ならない—におかれたものとして成立しているからである。

かくして、「自己意識」章以降の『精神現象学』の叙述における「存在の否定性」と「自己意識の否定性」との関係は、次のように規定される。

意識が無限性の概念をそれ自体として思惟することができないとしても、意識はこの概念を〔生命という〕対象として持つのであり、自らを形式的な自己意識として把握することができる。生命と自己意識は同等の構造をもつのであり、両者は、両者の区別項を自分から作り出し、そして自分の内へと受け取り返すことができるのである³⁰。

以上のようにして成立した、存在と自己意識相互の関係という問題を考えるにあたって著者は、「自己意識」章において「生死を賭けた闘争」、「主奴弁証法」そして「懷疑主義」というトピックに、すでに『精神現象学』全体に引き継がれるモチーフを次々と見出してゆくが、ここで大切なのはとくに「懷疑主義」と「不幸な意識」である。「生死

²⁴ BN., 146.

²⁵ ヘーゲルはこの事態を、物の「それだけである（対自的な；für sich）」側面と「対他的な」側面との矛盾として述べている（GW9., 77）。

²⁶ BN., 148.

²⁷ GW9., 99ff.

²⁸ GW9., 104.

²⁹ Ebd.

³⁰ BN., 153.

を賭けた闘争」から「主奴弁証法」に至る流れの中から著者が明らかにするのは、まさに「生命」と「自己意識」が「奴」の「労働」のなかで統一的に把握されているということであるが³¹、「労働」という経験の成果である「ストア主義」の「実現態 Realisierung」³²とヘーゲルがみなす、「懷疑主義」のなかに、「否定性」の問題の重要な論点があると著者は述べる。

懷疑主義においてはストア主義的主体の否定性は「実在的否定性 reale Negativität」へと至り、他方で欲望と労働のうちで生じてきた否定はいまや「自己意識的否定 selbstbewußte Negativität」になる。かくして、懷疑主義は『現象学』のこれまでの運動における高みを叙述する。というのは、いまや意識は否定をそれ自身でも、また対象においても、自覚的に引き受けることができるからである³³。

懷疑主義において、生命と自己意識の両否定性は、一つの主体の営みとして行われる。対象に対する否定性が、かえって自己否定になるという懷疑主義の矛盾した立場は、本稿1節で論じた「懷疑主義論文」の流れを汲むものであるが、この論理は、こうした懷疑主義から生まれる「不幸な意識」の議論を通じて、「理性」へと高まる。そして、著者によれば、懷疑主義におけるこうした否定性の運動を通じて、すでに「絶対知」の構造が成立していて、残る理性章以下はこの過程の歴史的な叙述（実証）として理解されることになるが、まさこの点に、『精神現象学』の失敗があるのだと著者はいう。最後にこの点について検討しよう。

4. 『精神現象学』における否定性の把握の成否

イエナ中期に現れた存在と自己意識という否定性の二つの形態を踏まえながら『精神現象学』における「否定性」の統一的把握の成否を考察するにあたって著者が指摘するのは、『精神現象学』に

おける「循環構造 Zirkelstruktur」である。著者が『精神現象学』否定性概念の統一的把握の失敗の根拠としているこの構造について、次のように言われている。

疎外が和解へ転換するという必然的な法則の援用は、意識に対して基礎づけられているのでなければならない。〔それにもかかわらず〕ヘーゲルの基礎づけは結局のところある循環に陥ってしまう。歴史哲学的な基礎づけに際しては、すでにある主観性理論が前提されていて、この主観性理論に従えば、意識は、それが疎外の和解へ転換する必然性を認識することができるというように構造化されているのである。〔しかし〕意識は、それはそれで、それを通じてか的主観性が疎外の和解への必然的な転換を認識する実在的なもの existent として確保されるところの歴史哲学を前提しているのである³⁴。

ここでは、ヘーゲルが『精神現象学』において試みた「意識の経験の学」のはらむアポリアが暴き出されている。すなわち、無前提性を旨とするヘーゲルの試みにおいて、歴史的な意識の経験をもって疎外の克服ないし和解を基礎づけようとするならば、こうした歴史的な経験を可能にする主観性理論を前提しなければならないし、反対に主観性理論をもって疎外の克服を基礎づけようとする場合、こうした理論は結局のところ歴史的な叙述においてその妥当性が担保されているのでなければならない。つまるところ、主観性の理論と歴史哲学的な叙述は相互に前提しあう関係にあらざるをえず、このことは無前提性に反することになるのである。

このことは、『精神現象学』の構造に照らすと、具体的には次のような事態として問題になる。それは、意識章の三つ組みと自己意識章という四つの章の内容—主観性の理論—が、理性章以降の論述—歴史哲学的叙述（実証）—と相互に前提しあう関係にあるということである。そして、このことはまさに、歴史哲学的な意味での「教養形成過程の否定性」が、結局のところ精神章 B における

³¹ このことは、自己意識が生命としてもつ「欲望」を妨げ、むしろ自己意識の勝義の自立性を担保するという労働の性格に基づくものである(Vgl. GW9., 115).

³² GW9., 119.

³³ BN., 158. 強調は引用者による。

³⁴ BN., 184.

「教養形成」の到達点として、和解が成立せず、むしろ「恐怖」³⁵に行き着いてしまったことによって、主観性理論の歴史哲学的な妥当性の担保が損なわれるという点で失敗だとみなされるのである。

そして、「現象学の循環構造は否定性の諸形式の同一化と対応する」³⁶。以下ではさらに、著者がヘーゲルの失敗の証左とみなす「循環構造」と『精神現象学』における「否定性」概念の（統一的）把握との関連についての議論を検討していきたい。

『精神現象学』における「否定性」概念を、著者はまず四つに区分し、この四つの「否定性」概念の統一的把握の成否について論じることになる。このうち三つについて、著者は次のように言う。

自己意識章の終わりにおいて、イエナ期の否定性の三つの根本形式が展開されきっている。その三つとは、〔知覚の対象の「否定的統一」にみられる〕アンチノミーの否定性、自己意識の否定性、生死を賭けた闘争の否定性である³⁷。

本稿3節で見たように、感覚的確信から自己意識章に至る論述のなかで、上に挙げられた三つの「否定性」はすでに成立している。

そして、こうした三つの「否定性」概念に著者が付け加えるのが、『精神現象学』において主体が一貫してもっている属性「教養形成」の「否定性」である。

否定性の三つの根本形式と、教養形成過程の否定性は区別せねばならない。教養形成過程の否定性の内部では、否定性の諸形式の同一化が一步一步行われてゆくのである。教養形成過程の否定性、懐疑や絶望の道ならびに意識の逆転は、次のように性格づけられうる。すなわち、意識の教養形成過程において否定性の諸形式は相互の関連のなかで定立され、かくして現象学的論証のなかでこれらの諸形式の統一が際立たされるのである³⁸。

ここで論じられる教養形成とは、精神章Bのそれではなく、さきにのべたように『精神現象学』全体を貫く意識のもつ属性としての、すなわち、『精神現象学』「緒論」で論じられた「意識の教養形成の歴史」³⁹とされるときのものである。

そして、さきの三つの否定性と、教養形成過程の否定性を取り結ぶにあたって重要なのが、「限定的否定」という概念であり、この概念はさらに二つの観点から次のように論じられる。

〔一方では〕意識との関係において、限定的否定を通じて、意識に対し哲学者の立場が外的に von außen 示されずに済む。しかし同様に〔他方では〕否定性の諸形式の同一化に際しても、限定的否定が存しているのでなければならない。否定性の諸形態の統一は、諸形式の相互帰入的戯れ Ineinanderspielen として理解されることができるのであって、統一は何か全く新しいものを付け加えるのではないのである。〔してみると〕限定的否定が意識との関係において成功していないのであってみれば、否定性の諸形式との関係においても限定的否定は成功し得ないことになるのである。『精神現象学』が限定的否定を意識との関係において扱う一方、『論理学』は否定性の諸形式をそれだけで für sich 叙述している。それゆえ、ヘーゲルの論理学が行う批判の課題は、限定的否定を否定性の諸形式との関係においてより正確に探究することなのである。しかしながら、限定的否定の二様のあり方はともに『精神現象学』においてすでにあらわれている。否定性の諸形式の相互帰入的戯れは転倒した意識の諸様態の漸進的な否定を可能にし、また反対に、意識は自分自身はなす経験と、その際にもたらされる自らの転回を通じて、否定性の諸形態の統一の認識へと至るとされているのである。こうした相互的な基礎づけにおいて、再び『精神現象学』の循環構造が現象化する⁴⁰。

³⁵ GW9., 321.

³⁶ BN., 186.

³⁷ BN., 186-187.

³⁸ BN., 187.

³⁹ GW9., 61.

⁴⁰ BN., 187.

「限定的否定」とは、ヘーゲルが『精神現象学』の「経験」概念を彫琢するにあたって重要な契機をなすものとして同書「緒論 *Einleitung*」⁴¹で導入したものであるが、その働きは、自らが対象に対してもつ知のあり方がその都度変遷を遂げるという事態に際して、個々の知のあり方を否定し忘れ去るのではなくて、その都度の固有の対象との関係においては誤謬でありながらも、自らがなす知の総体にとっては本質的な契機であるとみなす、という思弁的な点⁴²にある。

ところが、上記のように、こうした個々の知のあり方を自らの経験の総体にとっての契機とみなすときのそのみなす手続きが、くだんの「循環構造」のゆえに、その論理的根拠を否定されるに至る、と言うのが著者の批判なのである。

かくして、ヘーゲルが『精神現象学』で行った、「否定性の諸形式の統一的把握」という目論見、ないしヘーゲルの「体系の試み」は、次のように皮肉な評価を受けることになる。

〔ヘーゲルの試みに対しては〕あるアポリアが存立せざるを得ない。そのアポリアとは、ヘーゲルの思弁的な試みの回避は、意識の立脚点を絶対化する恐れがあるが、こうした〔意識の立脚点の絶対化という〕恣意を避けることは、ヘーゲルの体系の試みに無理を強いることになってしまう、というものである。——それでもなお、こうしたアポリアがアンチノミーを構成するものであるかぎり、アンチノミーを思惟することは肝要である。ヘーゲルの体系の試みは、それが破壊されたのちでもその意味を持っているのである⁴³。

著者がヘーゲルの試みに対してくださ結論は極めて皮肉なものである。ヘーゲルがイエナ初期以来、悟性的な対立を乗り越えるべくして要請し、懷疑

主義にとっても重要な意義をもつ「矛盾の思考」という立場が、まさにヘーゲル自身の行き当たる隘路として捉え返されているのだ。つまり、歴史的な実証の理論と、現に経験をする主観性の理論という二つの契機は、双方の「循環構造」に巻き込まれざるを得ないため、論理的な整合性を保ちえない。しかしそれでもなお、この両者はいずれもヘーゲルの言う思弁的な立場—イエナ初期の「哲学の欲求」以来目指され続ける立場—の確立にとっては欠かせないのである。

おわりに

本稿では、著者が『精神現象学』の課題とみなす「否定性の統一的把握」という論点について、『概念』のいくつかの論点を検討してきた。最後に、『概念』に欠けている論点を挙げ、『概念』において指摘された『精神現象学』の欠点の乗り越える方途を簡単に描いてみたい。

本稿で見てきたことをまとめると、著者が『精神現象学』の失敗とみなすのは、(1)『精神現象学』が抱える「循環構造」のゆえに、「存在の否定性」と「自己意識の否定性」とを統一的に把握するはずの「教養形成過程の否定性」を支える「限定的否定」が正当な論理的根拠をもたず(2)近代社会の分裂と取り組むはずの意識は、まさに「教養形成」を扱う精神章 B の結末として、「恐怖」に陥ることになる⁴⁴という論点からして、しかるべき到達点に至らない、という二つの点においてである。

この問題点、とりわけ前者の「循環構造」を踏まえながら、今後考察したいのは、著者の議論において重視されていないかに見える「推論」という概念枠である⁴⁵。かの「循環構造」に基づいて著者がその論理的根拠を欠いたものと見なすところの「限定的否定」は、本稿 2 節で引用したよう

⁴¹ 本稿 1 節で簡単に触れた「懷疑主義」のモチーフは、『精神現象学』「自己意識」章における意識の一形態としての懷疑主義とは別の位相で、「限定的否定」との関連で論じられている(Vgl. *GW9.*, 56-57)。

⁴² 「思弁」に込められた「否定性を備えながらも全体における契機として保存する」という意味については、山口祐弘『ドイツ観念論における反省理論』勁草書房、1991年、81-88頁を参照。

⁴³ *BN.*, 192.

⁴⁴ 本稿では紙幅の都合から立ち入って論ずることができなかったが、著者の見解ではヘーゲルが「疎外」から積極的な意義を見出すはずの同章において、「教養形成」の立場の到達点が、フランス革命が陥った恐怖政治を描く「絶対的恐怖」(*GW9.*, 321)のうちに見出されている。この点に著者は、「教養形成」を通じた意識の立場の行き詰まりを明らかにする(*BN.*, 168)のである。

⁴⁵ 『概念』第三部Ⅱ章2節(*BN.*, 160)では、「推論」構造の「不幸な意識」の議論における再演が確認されているが、それ以上の論述は見当たらない。

に、「内在的否定」と言い換えられているものであったが、管見ではこの「内在的否定」を論理的に根拠づけるものこそ、ヘーゲルの「推論」である⁴⁶。

ヘーゲルが『精神現象学』最終章の「絶対知」の課題として挙げるものに「実体の側における和解」と「主体の側における和解」との「合一 Vereinigung」⁴⁷があるが、こうした双方の和解が成立するのは、主体ないし「対自存在」の側における自己否定の契機（良心の諾 Ja）⁴⁸ならびに実体ないし「自体存在」の側における自己否定の契機（神の死）⁴⁹の双方の否定を通じてのことである。そして、この二つの自己否定という否定性の合一によって成立するのが、序論で論じられる「実体＝主体」⁵⁰理説であるが、この統一を可能にする否定性こそ、『精神現象学』の到達点において獲得される「内在的否定」の論理に他ならない。それゆえ、著者が分節化し得なかった、「教養形成過程の否定性」と、「単一な否定性」⁵¹との関係性⁵²は、「実体における否定性」と「主体における否定性」の推論的統一において、とりわけその「推論」の

「中項」の実相を検討することで明らかにされうるのではないだろうか。「主体＝実体」理説を、この双方の無媒介な同一性ではなく媒介された同一性として把握するために一まさに「[実体は主体]である」を単なるコブラではなく充実されたコブラたる「中項」として理解するために⁵³—必要なのは、主体と実体の関係に内在する否定性の把握であろう。こうした、主体と対象的世界の双方に内在した否定性を、両者を媒介する「中項」の具体的充実を通じて成立する「主体＝実体」理説から、否定的なものに対する否定的な関係のあり方を学びとることができるのではないだろうか。

（おかざき りゅう・一橋大学大学院博士後期課程）

⁴⁶ 評者は「ヘーゲル『精神現象学』における行為の二重性—相互承認論における否定性の性格をめぐって—」（東京唯物論研究会編『唯物論』第87号、2013年11月）において、「推論」における「内在的否定」の論理構造について論じた。『精神現象学』における「推論」の意義を検討した古典的な文献としては、Hermann, Schmitz, *Hegel als Denker der Individualität*, (Meisenheim am Gran, 1958)を参照。また、著者とは異なり、「意識経験学」の「精神の現象学」への転換という点に『精神現象学』の失敗の根拠をみながらも、「推論（同書では「推理論」と表記されている）」に依拠しながら肯定的結論を見出そうとするものに、黒崎剛『ヘーゲル・未完の弁証法—「意識の経験の学」としての『精神現象学』の批判的研究—』（早稲田大学出版部、2012年）がある（推論に関しては特に510頁以下）。ただ、「推論」概念を通じた読解に際しても、著者の指摘する『精神現象学』の破綻を根拠づける、主観性理論—歴史の実証という二分法そのものを、『精神現象学』固有のロジックに即して検討し直す必要がある。このことは今後の課題にしたい。

⁴⁷ GW9., 425.

⁴⁸ GW9., 362.

⁴⁹ GW9., 401ff.

⁵⁰ GW9., 18.

⁵¹ Ebd.

⁵² 著者はこの点について「純粋な単一な否定性こそ、そこから存在の否定性と自己意識の否定性から帰結する、かの包括的な主体性 umfassende Negativität である」（BN., 188）と述べているのではある。しかしながら、著者の主張する、『精神現象学』の構成的な破綻の問題を、ここで言われる「包括的な主体性」が回避しうるロジックは明確には提示されていないように思われる。

⁵³ 「充実されたコブラ」については、『論理学』概念論における「判断」から「推論」への移行に関して次のように言われる。「主語と述語の規定された関係は充実された、あるいは内容豊かな判断のコブラであって（…）判断から再び生じた概念の統一である。——こうしたコブラの充実 Erfüllung der Kopula を通じて、判断は推論へと生成したのである」（G. W. F. Hegel, *Wissenschaft der Logik. Die Lehre vom Begriff*. in: Friedrich Hogemann, Walter Jaeschke(Hg.) *Gesammelte Werke. Bd. 12.* 89)。